総主事マンスリーレポート

2015. 09　総主事　岡　成也　No. 16

夏の日差しが和らぎつつ、朝夕も涼しく感じられるようになりました。先日、台風直撃、強烈な風雨と停電に不安な日々を過ごし、日々の生活のありがたさを実感いたしました。
皆さまにおかれましても大きな被害がなかったこと幸いに存じます。

さて、今年は熊本草葉町教会が創立１３０周年を迎え、来年の１月３０日は熊本バンド１４０周年という節目の年でもあり、同志社大学と熊本草葉町教会、熊本ＹＭＣＡが協力し記念事業として、９月１２日（土）県立劇場で２２年ぶりに同志社大学マンドリンクラブの熊本演奏会が行われます。是非ご来場ください。

熊本朝祷会2500回感謝祈祷会（6月20日（土）日本ナザレン教団熊本教会）

熊本朝祷会は、１９６７年6月１９日に全国４５番目として、熊本ＹＭＣＡを会場に実施され、４８年間祈りの時を絶やすことなく今日まで続けられています。ながみねファミリーＹＭＣＡ運営委員の歌野清三さん、堀原園江さんをはじめ、多くの方々のお支えと祈りのもと２５００回という記念祈祷の時を持つことができたのです。当日は、５１名の参加があり、日本聖公会の原寛牧師の開会のお祈りに始まり、「リディア川（ガンギティス）ほとりの祈り会」と題して愛泉祈祷院終生院主である日高範嘉牧師の説教がありました。日高牧師は、「心を一つにして祈ることで、聖霊に満たされ、連鎖し、広くムーブメントとして広がっていくこと、まさに熊本バンドの祈りによって、恵みや祝福をキリスト教会内外至る所に与えた。」と祈ることの大切さについてお話されました。長年支えていらっしゃる歌野清三さんは「神様のお導きとお恵の賜物であり、多くの方々のとりなしの祈りとご協力に感謝します」と感謝を述べられていました。この長らく続いている２５００回の中には、２，３名の時もあったそうですが、教派を超えて、キリスト教に連なるものが祈りの時を持つことは、非常に意義深く、聖霊に導かれながら継続されています。

毎土曜日朝７：３０より日本ナザレン教団熊本キリスト教会（九品寺）にて、実施されています。共に祈りの時を持ちませんか。

※９月１２日に日本ナザレン教団熊本キリスト教会は１００周年を迎えられます。

「希望」と「絆」を確かめ合った第4回あそぼうキャンプ（8月7日（金）～9日（日）阿蘇YMCA）

「阿蘇」の地で、次代を担う子どもたちが、これからの未来を「望む」意味を込めて『あそぼうキャンプ』をスタートし今年で４年目を迎えました。東日本大震災で熊本県に避難をしている子どもたちと九州北部豪雨災害で被災した広島市・阿蘇市・熊本市の子どもたちとが阿蘇の大自然の中、ＹＭＣＡキャンプを通して、互いに不安な気持ちに寄り添い、相互の交流と絆を深める心のケアを目的として、２泊３日のあそぼうキャンプを実施することができました。

主　催　　公益財団法人　熊本ＹＭＣＡ
後　援　　社会福祉法人　阿蘇市社会福祉協議会・日本ＥＭＤＲ学会
協　力　　ワイズメンズクラブ国際協会西日本区九州部
アドバイザー　ニキハーティーホスピタル理事長　仁木　啓介先生ほか４名
内　容　　今年は初めて夏休みに実施できたので、プールやカヌーの水プログラムを実施
恒例の乗馬、マゼノ渓谷での清流遊び、キャンプファイヤー、あそぼう宣言等
たくさんの思い出を作ることができました。
第５回あそぼうキャンプは、２０１６年８月１９日～２１日に開催予定です。

2015年度熊本YMCA学院海外研修のお知らせ

熊本ＹＭＣＡ学院の海外研修は、諸事情を鑑みて、今年度は内容と期間を以下のように一部変更させていただきました。国際情勢の変化とともに海外への派遣事情も刻一刻と変化いたしますが、海外ＹＭＣＡとの学生のみなさんたちの交流を中心に据えた、熊本ＹＭＣＡ学院らしい研修の機会として今後とも取り組んでいく予定です。また、海外派遣のみならず、８月の広島でのピースセミナー、９月の韓国でのアジア大会、全国リーダー研修会など多くの機会を創造し、出会いと感動体験が、すばらしい経験値となっていくことを祈っております。皆さまには、ユースの学生の皆さんへのご支援なども継続いただければ幸いです。

【海外派遣予定】

学科名	期間	派遣先	引率者
① 医療事務管理学科	8/31～9/4	シンガポールＹＭＣＡ他	宮本昌宣さん
② 経営ビジネス科	8/31～9/4	シンガポールＹＭＣＡ他	米満一美さん 中島修さん(団長)
③ 建築科	12/12～12/19	東京・台湾・シンガポール	熊本哲郎さん
④ 生涯スポーツ科	12/10～12/16	ホノルルＹＭＣＡ・マラソン	横山純一郎さん 小山靖代さん
⑤ 国際ホテル科	12/16～12/21	ホノルルＹＭＣＡ他	尾道一幸さん

＊老人ケア科は8/23～8/31 チェンマイ・チェンライＹＭＣＡを訪問予定でしたが、
8/17 タイバンコク中心部の交差点で爆弾によるテロ事件が起こりましたので、安全を考慮して
延期としました。

職業実践専門課程について

職業実践専門課程とは、専門学校のうち、企業等と密接に連携して、最新の実務の知識・技術・技能を身につけられる実践的な職業教育に取り組む学科を文部科学大臣が「職業実践専門課程」として認定する制度です。大きな特徴は、企業等が参画する教育課程編成委員会を設置し、色々なご意見をいただきカリキュラムを編成すること、更に、卒業生や保護者、企業等が参画して学校関係者評価委員会の設置により、より充実した学校創りに努めることが挙げられます。この制度は２０１４年度から始まり、現在では全国で６７３校２，０４２学科、熊本県では１０校１７学科が認定されています。熊本ＹＭＣＡ学院では２０１５年度より、建築科、国際ホテル科、生涯スポーツ科、老人ケア科の４学科が認可を受け、更に、２０１６年度の認可へ向けて、経営ビジネス科、医療事務管理学科、児童

福祉教育科の３学科が準備を進めています。現在、中教審において新しい学校種、職業大学（仮称）について議論がなされており、この職業実践専門課程の認可を経て新しい学校種への移行となる予定です。

「瞬感命輝」～2015年度熊本YMCA委員研修会を開催～

２０１５年度委員研修会が８月２０日（木）８３名の運委委員、職員参加で開催されました。実行委員長は藤本義隆さんで、島優子さんの開会礼拝司会と奏楽後に、感動教育家高光りょうすけ氏による「あなたの中の天才と出逢う瞬感！」と題して２時間２５分の講演とワークショップが行われました。

あなたの中の天才と出逢う３つのキーワードとして
１．夢を本気で語り、目標を明確にする。
２．自分の中の天才を引き出す。
３．瞬間命輝（あなたは輝くステージに立っている）

「大人が変われば子どもが変わり、子どもが変われば未来が変わる」「人生に夢があるのではない、夢が人生をつくる・・・・・」等スタッフとレイパーソンの協働で、互いに世界に一つしかない大切な存在として認め合い、同じ使命達成に向けて、それぞれの天才を引き出し、互いに仕えあっていこう！とのメッセージをいただきました。

今回の研修では、レイパーソンとの協働とのテーマで、各ＹＭＣＡから若手の職員含め、多数の職員が参加できたことが一つの成果でした。今後は、Ｙストーリーではないですが、一人ひとりがＹＭＣＡでいのちを輝かせる感動の物語を発信できるようにしたいものです。高光さんをご紹介いただいた、むさしＹＭＣＡの来海恵子さんをはじめ、各ＹＭＣＡから実行委員として関わっていただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

上通チャリティ市場（8月2日（日）上通アーケード）

８月２日（日）に上通ＹＭＣＡチャリティ市場を開催いたしました。
仲井運営委員の名司会での開会式、実行委員長の村田紀美子委員挨拶でスタートしました。熊本市中心商店街では「ゆかた祭」も行われ、上通ＹＭＣＡは同催しの総合案内とゆかた着付けステーションも合わせて担当。ゆかた姿の人が行きかう賑やかなチャリティ市場となりました。

アーケードでは、国際ユースボランティアの大学生と台湾ＹＭＣＡからのＩＣＣＰＪ実習生によるスマトラアイスコーヒー販売、ＹＭＣＡ就労支援事業所によるアクセサリー販売、ミャンマーエイズ孤児支援のための物品販売を行いました。

館内では、外国人職員によるアイスクリーム販売と国際色も豊かでした。運営委員とジェーンズワイズメンズクラブの協働で、飲み物や野菜の販売も好評。あっという間に売り切れとなりました。もちろん、メインは、バザー。あんな物こんな物、日用雑貨・素敵な小物・食器類等々から知る人ぞ知る！？の掘り出し物も飛び出して、来街者から商店街で働く方々まで、多くの皆さまに楽しんでいただいた上通ＹＭＣＡならではのお祭りでした。今年も多くの皆さまのご協力をいただき、無事に終了することができました。

益金も目標１０万円を超え、１２１，５２２円となりました。
ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

９月は、みなみＹＭＣＡの「サザンフェスタ」が９月６日（日）１１：３０～１５：３０、ながみねファミリーＹＭＣＡの「ながみね祭」が９月１９日（土）１６：００～２０：００に開催されます。是非足をお運びください。また、お関わりいただく委員の皆さま、ご協力ありがとうございます。

第23回会員スポーツ大会が実施されます

９月２７日(日)午前８：００より中央ＹＭＣＡ体育館にて第２３回会員スポーツ大会が行われます。今回は「防災ワイリンピック」と銘打ち、バケツリレーや搬送リレー等、防災をテーマにした競技を通して、熊本ＹＭＣＡ会員の親睦を深めます。近年の国内外での大きな災害は私たちの防災意識を高め、実際に熊本ＹＭＣＡでは地域との協働による防災プログラムの取り組みや防災協定を締結しました。

「防災ワイリンピック」では、防災をキーワードに防災意識の向上と会員同士の交流と結束を目的としています。この大会を通して、会員、地域との連携がより一層深まり、防災に対する高い意識向上が期待されます。皆さまの積極的な関わりをお願いいたします。

皆さまの健康が守られ、神様の祝福が豊かにありますよう
お祈り申し上げます。

在主

No.749 2015
September 9

THE YMCA
The Young Men's Christian Association News

今こそ歴史から学ぶとき
― 敗戦後70年目を迎えて ―

前日本YWCA理事長　鈴木 伶子

敗戦当時、人びとは戦争で家族や家を失い、打ちひしがれていましたが、安心して眠れる平和が来たことにホッとしていたことは、6歳だった私の目にも明らかでした。その後70年間、日本は戦争せず、日本の軍隊が人を殺したり殺されたりすることもなく過ごしてきました。

一方、一度戦争をして他国を侵略したり人を殺したりすると、70年の歳月がたっても、犠牲者の苦しみが消えることはありません。戦争で失った家族を思って涙している人は、今も国内外に大勢います。神社参拝を拒否して殺された韓国の牧師の孫にあたる人、少女時代の叔母さんが日本兵に首を切られたというフィリピンの人、南京虐殺の場面に居合わせたという中国の人など、私自身、日本に苦しめられた多くのアジアの人びとに出会いました。おわびして済むものではないという、いたたまれない経験でしたが、それでも私たちが戦争中の罪を悔いて謝罪した時、彼らは苦しみを超えて私たちの謝罪を受け入れ、赦(ゆる)してくれたのです。

その意味で、二度と戦争をせず戦力を持たないという日本国憲法9条は、アジア・太平洋の国々に対して、再び同じ罪を繰り返さないという日本の約束なのです。

アジア・太平洋の国々では、被害者の個人的な記憶だけではなく、民族の記憶として、日本の侵略戦争の事実をきちんと継承しています。他方、日本人は自らの罪を恥として、忘れようとしているように思います。

「歴史は繰り返す」というアメリカの哲学者ジョージ・サンタヤーナの言葉があります。原文は「過去を記憶できないものは、その過去を繰り返す運命から逃れられない」※という意味です。

現在、自衛隊が米軍と一緒に戦えるようにする法案が、すでに衆議院を通過し参議院での審議となりましたが、今こそ私たち日本人は歴史を記憶し、再び戦争の悲劇を繰り返さない覚悟を決める必要があります。

イエス・キリストは、「敵を愛せ」と教えられました。哲学者カール・フリードリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカーは、「敵を理解するように努めること、それは、彼の状況に身を置き、彼の立場から世界を見、彼の関心や希望、彼の不安や傷ついた心を知るように努力すること」と述べ、キリストの教えは現代政治の指針となるということを示しました。

強国との同盟関係で自国の安全を確保しようとするか、主義主張が違っても、すべての人びとと向き合い、共に生きることで平和をつくり出そうとするか。私たちは今、大きな分岐点に立ち、キリスト者としての生き方を問われています。

※ "Those who cannot remember the past are condemned to repeat it." ―George Santayana

ラポール RAPPORT

相手と向き合って
心を合わせていくこと。
（仏語：親和・共感的関係の意）

「しかし、勇気を出しなさい。」

日本キリスト教団
三・一教会 牧師
平良 愛香

聖書には「平和（ヘブライ語でシャローム）」という言葉がたくさん出てきます。しかし最初から同じ平和を求めていたわけではありません。最初はイスラエルの平和こそがシャロームでした。敵をやっつけ、ときには先住民を排除して自分たちの国を発展させることが平和だったのです。しかしやがてイザヤなどの預言者たちは、「そうではない。神の支配が世界を包むことが平和なのだ」と気付き、平和を世界に広げようとしました。

人間をとことんまで愛する神。その神の支配こそが平和であるとき、私たちは「人間が大切にされていない状況」を「平和ではない」と認めざるを得ません。すべての人が大切にされる状況こそがシャロームなのです（シャロームという語も、パレスチナの人々にとっては抑圧者の言葉でしかないことに気付いて、アラビア語の「サラーム」を使う人たちもいます）。

さらに、イエスが語った「平和を実現する人々は幸いである（マタイ5章9節）」という言葉は、心の平安だけではなく、みんなが共に生きられる世界を実現させる人々への祝福として聖書に残りました。

私が生まれたのは1968年、米軍に支配され、先の戦争での痛みが癒えないまま今度はベトナム戦争に加担する側になってしまった沖縄でした。「もう二度とこんな苦しみを味わいたくない。そして誰にも味わわせてはならない」と平和を願ったのに、今度は戦争に「加担」する側になってしまったのです。沖縄はベトナムの人たちから「悪魔の島」と呼ばれていました。基地があるということは、基地被害にも苦しみますが、戦争を生み出す側になるということでもあったのです。だからこそ、今沖縄の人たちは、「これ以上加害者になりたくない」と声を上げて新基地建設に反対しているのです。

今、日本全体が戦争をつくり出す国になりつつあります。神の平和がどんどん遠のいていくように感じることすらある。そんなとき私はもう一つのイエスの言葉を思い出すのです。ヨハネ16章33節「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」サラーム！

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、
イエス・キリストにおいて示された
愛と奉仕の生き方に学びつつ
世界のYMCAとのつながりのなかで、
次の使命を担います。

私たちは、
すべての人びとが生涯をとおして
全人的に成長することを願い、
すべてのいのちを
かけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、
一人ひとりの人権を守り、
正義と公正を求め、
喜びを共にし痛みを分かちあう
社会をめざします。

私たちは、
アジア・太平洋地域の人びとへの
歴史的責任を認識しつつ、
世界の人びとと共に
平和の実現に努めます。

2015年9月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日　第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料62円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003　東京都新宿区本塩町7
TEL：03-5367-6640　FAX：03-5367-6641
URL：http://www.ymcajapan.org/
発行人／島田 茂　編集人／山根 一毅
印刷／あかつき印刷株式会社

戦後70年・平和の祈り

「私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。」

これは1996年6月15日、第106回日本YMCA同盟委員会にて採択された「日本YMCA基本原則」※の一文です。

戦後70年を迎える今年、YMCAは12月に中国・南京にて「第6回日中韓YMCAピースフォーラム」を開催します。私たちが戦時下のアジアで何をし、何をしなかったのかを自らに問い、アジアの仲間と祈りを合わせ、平和の実現に向けて歩みを続けていきます。

※「日本YMCA基本原則」は、本紙1面左下に掲載されています。

「これから」—

田附和久さん（47歳、在日本韓国YMCAスタッフ）と齊藤實さん（88歳、YMCA史学会理事長・元東京YMCA副総主事）の往復書簡。戦後70年の今、日本とアジアのYMCAの歴史を振り返り、この書簡を通してこれから進むべき道を考えます。

齊藤 實さんへ

ここに、1940年に東京YMCA会館前で撮影された一枚の集合写真があります。「皇紀二千六百年奉祝基督教青年会全国協議会」の記念写真です。この写真に象徴されるように、かつて日本のYMCAは、天皇制国家主義・軍国主義の圧力に屈し、侵略戦争遂行に加担した歴史を有します。またそれ以前に、帝国主義の侵略を受けるアジアの仲間たちの思いに寄り添うことができなかったことも知られています。時代の荒波に抗い、アジアの民衆と共にあろうと努力した先輩方もいましたが、そうした働きは時代の主流にはなり得ませんでした。

敗戦後、そうした過去の評価をめぐり、『YMCA（現THE YMCA）』紙上で幾度か激しい論争が行われましたが、一つの結論に達したわけではありません。ただ、日本YMCAの歴史認識は多くの議論や思索の過程を経て培われ、日本YMCA基本原則へと到達したと私は考えます。論争の当事者のお一人でもあった齊藤先輩は、論争の意義や、「日本YMCA基本原則」について、いかに評価していらっしゃるでしょうか。

今日、東アジアでは人びとの往来が盛んになる一方、いずれの国でも排他的なナショナリズムが勢いを強めており、国家や政権政党に都合よく歴史を書き換えるような動きも進んでいるように思われます。こうした状況において、私たちYMCAには、何ができるのでしょうか。

シンプル過ぎる答えかもしれませんが、まず出会い、友となり、知性と尊敬をもって付き合うこと。私たちが行うべきことは、それに尽きるのではないかと考えます。

1919年、東京朝鮮YMCA（後の在日本韓国YMCA）に集まった朝鮮人留学生が独立宣言を発表し、「朝鮮独立運動の根拠地となったYMCAは潰してしまえ」という声が強くなった時、彼らに反論し東京朝鮮YMCAを守ったのが、当時東大YMCAの理事長であった吉野作造でした。吉野は、日常的に朝鮮人や中国人の留学生と対話し、友となっていたからこそ、朝鮮人青年たちの心からの叫びを、知性的に正しく聞き取ることができました。そして今、私たちはアジアの仲間たちの友となり、国家の枠組みを超えたオルタナティブな関係を築けるかどうか、再び問われていると思うのですが、いかがお考えになられますか。

田附 和久

生に聞いてみました

学んでいる中国・韓国出身の学生に聞いてみました。

❶ 30年後の東アジアは、どうなっていると思いますか？
❷ その時、あなたはどこで何をしていると思いますか？

鄭 芳媛（テイ ホウエン）・中国出身
京都YMCA国際福祉専門学校
日本語科

❶ 国と国のつながりが必ず強くなります。国は人のように自分の良さを持っているはずです。お互いに協力して発展し、国の間の壁が薄くなっているかもしれません。

❷ 自分の店を営んでいます。さまざまな国を旅行して、その国の文化や環境を理解しようとしています。そして自分の力でボランティア活動をしています。

金 珉成（キム ミンソン）・韓国出身
横浜YMCA学院専門学校
日本語学科

❶ 東アジアでは中国が大きな力を持つ国になっていると思います。中国国内の貧富の差、日本の自然災害を心配します。朝鮮半島の状況は変わらないかもしれません。

❷ 若い間にいろいろな国の言葉と文化を学び、専門の自動車関係の知識を生かしながら仕事をしていると思います。中国や米国、カンボジア、日本などが考えられます。

金 晶（キン ショウ）・中国出身
神戸YMCA学院専門学校
日本語学科

❶ アジアの中心である日本・中国・韓国は、経済や政治面で衝突しながらも、その結果、結びつきが強くなり、世界経済の中心は欧米から東アジアに移っていると思います。

❷ 私は朝鮮族として日中韓の文化を、人並み以上に理解していると思いますから、この長所を生かして日中韓の貿易関係の仕事をしていると思います。

私が「平和」について考えるようになったのは…

荒井 浩元（とちぎYMCAスタッフ）

中国留学時代の荒井さん

先日、私が運動あそびを指導している小学生の子どもたちと「平和」について語り合うときがありました。「みんなが思う平和ってどんなとき？」と問い掛けると、「おいしいご飯が食べられるとき！」「お友達とケンカしても仲直りができたとき！」「学校で友だちと遊べるとき！」など、さまざまな意見が出ました。日ごろ私たちが当たり前と思っている何気ないことが子どもたちにとっては一番の幸せ、平和なのだと気づかされ、心を打たれました。

約10年前、私が高校生のころ、中国南京市の高校に1年間留学した経験があります。当時は、小泉首相の靖国神社参拝問題がきっかけで、政治的にも国民的にも日中関係がとても悪化していました。「あなたが日本人だから友達になれない」と言われたつらい経験もありました。私が日本人ということで差別を受け、日本人として情けない気持ちになったときもありますが、中国のホストファミリーや現地高校のクラスメートが心から支えてくれ、とても充実した留学生活を送ることができました。

日本人高校生の一人として、平和を願う一人として、何ができるのか、歴史を繰り返さないようにするにはどうすれば良いのか。私が「平和」について考えるようになったのは、この中国留学がきっかけでした。

私たちは日々の生活の中にある小さな幸せに気付かず、当たり前に過ごしてしまうことがあります。子どもたちの感じる「平和」を実現するには、「平和」を祈り、「平和」のためにどのようにアクションを起こしていけばよいのかを考え、行動し続けていくことが大切なのではないでしょうか。

戦争って、平和って何なんだろう。

新谷 美保菜（広島YMCA国際リーダー）

ピースセミナーでの新谷さん（左）

私は大学1年生から「広島YMCAインターナショナルピースセミナー」の活動に携わっており、今年で4年目になります。小学生のころから、学校で原爆についての平和学習をしてきましたが、年を重ねるにつれ、その活動の機会は少なくなり、広島に住んでいながらも「廣島の原爆」という過去の現実からは、ほど遠い生活を送っていました。しかし、この活動を通して、国内外を問わず多くの人が原爆のことについて、広島の人以上に興味を抱いているということに気付かされました。このことから、広島で育った人間として、とても恥ずかしく思ったのと同時に、原爆（核兵器）についての正しい知識を持ち、平和について発信していかなければならないと感じるようになりました。

このセミナーで学ぶ内容は、原爆のことだけではありません。参加者が育った国や地域の紛争のことや平和を創り出すための取り組みなどを知り、国内外の若者の平和に関する思いなども知ることができます。

参加者の中には、かつて自分の国で起こった戦争から、日本に対してあまり良い印象を持っていない人もいます。自分の知らなかった歴史を参加者から聞いた時、「戦争って、平和って何なんだろう」とあらためて考えさせられました。

今年で37回目を迎えるピースセミナーのテーマは「未来に向かって」です。参加者が一緒になって平和について考え、それぞれが何かを感じて帰ってもらえるように、リーダーとして今年もお手伝いをしていきたいと思っています。

微力であっても無力ではない。

学生YMCA 関西地区共働スタッフ 大川 祈

インド滞在先の子どもと大川さん

私が育った山口県岩国に暮らす人びとの生活は、常に米軍基地をめぐる問題に巻き込まれ続けてきました。基地拡張で削られた山、飛び立つ戦闘機の騒音、アメとムチの政策、抗議行動が続く中でのオスプレイの搬入。中でも子どものころから一番嫌だったのは、同じ地域に暮らす、人と人との関係性が壊されてしまうことでした。自分や家族が基地の中で働いていたり、自衛隊として生活をしていたりする人もいます。基地拡張工事の現場を訪れた時、カメラを向けた友人に対して、作業中の人が怒鳴った言葉が忘れられません。「私たちも上から言われてやっているだけなんだ」。

岩国を訪れる学生YMCAのOBOGとの出会いや兄の影響もあり、5年前大学入学を機に、私も学生YMCAに関わり始めました。活動の中で特に心に残っているのが、インドスタディキャンプです。日本よりもはるかに厳しい差別や貧困や分断の現実を前にしても、決して諦めることなく、目の前の子どもや他者に仕え、平和を創り出そうと草の根で働き続ける方々に出会いました。その姿は、故郷である岩国の人たちが、日常の中で基地の暴力に抗（あらが）い続ける姿に重なるようでした。

「微力であっても無力ではない。権力が一番恐れることは、私たちが団結することなのだ」、これは岩国で聞いた言葉です。私たちは「人が人として」大切にされない社会に生きています。「安全保障」という名の暴力では決して平和を創れないことを、歴史から学んでいます。私もまた自分の足元から、出会いをおぼえ、他者の声を聴き、共につながり行動していきたい。それが、大学と地域に生きる学生YMCAに関わる者としての、私の思いです。

往復書簡

―日本のYMCAの「あの時」と今、そし

田附 和久さんへ

ご指摘の「論争」は、日本ＹＭＣＡ同盟総主事であった齊藤惣一※の伝記刊行を機に、同盟機関紙『ＹＭＣＡ』紙上で１９６５年10月号から４カ月続けた《「斉藤惣一とＹＭＣＡ」論争》でしょうか。あの論争は、「斉藤という一主事の死がＹＭＣＡのある時代の終焉を意味した」と、『月刊キリスト』編集長・高戸要が読後感を述べたことに始まるものでした。この時私は、「齊藤先生の時代がその死によって終わったのであれば、ＹＭＣＡの何を終わったものとしなければならないか」という明確な自覚が必要だと述べました。

貴兄がお示しの写真が、その「ある時代」の「終わるべきもの」の典型です。これは１９４０年10月、主題に〈東亜新秩序確立の精神的基盤〉と〈新体制下における青年の生活〉を掲げて齊藤惣一はじめ日本ＹＭＣＡ幹部が勢揃いした協議会で撮影されました。開会に先立ち、「二重橋前で……皇国に対する誓いを新たにし……神田美土代町の会場まで日章旗を先頭に行進し……新しく定められた会員綱領を唱和した」のです。政府の干渉で「同盟」から「日本基督教青年会」に組織を換えて定めた会員綱領の第一は、「我等ハ皇室ヲ尊ビ、国体ヲ重ジ皇国ニ忠誠ヲ捧グ」でした。

１９９６年に採択された「日本ＹＭＣＡ基本原則」は、美しい言葉で示されています。しかし、国策に順応して歩んだ罪過との決別を示していません。「国民精神総動員」的な施策の再来を阻止するためにも、キリスト教信仰に拠って立つ誇るべき「民間自主独立性」を見失ってしまわないように、「ＹＭＣＡとは何か」を問い続けましょう。

ご指摘の通り、諸国の友にまず出会い、知性と尊敬をもって付き合いましょう。自国の歴史を踏まえた者たち同士であればこそ、相手を受け入れて交わりは深まります。「日本」と「日本ＹＭＣＡ」が歩んだつらい事実をしっかり踏まえるお互いでありたいものです。

齊藤實

※齊藤惣一：第3代（1919－24）、第5代（1933－56）日本ＹＭＣＡ同盟総主事
第3代（1924－34）東京ＹＭＣＡ総主事

留学

現在、日本のYMCAで

金 ボム（キム ボム）・韓国出身
福岡YMCA日本語学校

❶ 30年後も、中国と米国という強大国の関係に影響を受ける状態が続くことに他なりませんが、韓国がどうするかによって東アジアの状態が変わるのではないかと思います。

❷ 私はカトリック教会に属している人ですから、韓国カトリック教会と日本カトリック教会のために働いているのではないかと思います。

王 韋雅（オウ イヤ）・中国出身
和歌山YMCA国際福祉専門学校
日本語科

❶ 相互に留学生が増え、交流がより深まり、各国の文化や魅力が容易に体験できるようになっていると思います。しかし、高齢化が進み、経済の格差が広がっているかもしれません。

❷ 英語、日本語、韓国語などを身に付け、その語学力と留学経験を生かし、通訳として東アジアのさまざまな文化や魅力を、世界に向けて発信していると思います。

石 藝滿（ソク イエマン）・韓国出
大阪YMCA学院　日本語学

❶ 中国と日本での生活を経の3国は「どうしてこんなながらも違うのだろうか」と考え経済、政治ばかりでなく、平和での先頭に立っていると信じます。

❷ わが国の韓国で、特に私のデザインを通じて世界をつを担いたいです。芸術は言語の壁越えることができます。

NEWS
各地の動きをご紹介します。

●「小さな命の意味を考える講演会」を実施 ——横浜YMCA

佐藤氏が紹介した、女川町の中学生による俳句「みあげれば がれきの上に こいのぼり」

7月4日に湘南とつかYMCAで、東日本大震災復興支援活動と「YMCAウォーターセーフティーキャンペーンの」一環として「小さな命の意味を考える講演会」を実施し、約135人の方が参加しました。講師には、この3月まで宮城県女川町や東松島市の中学校で国語と防災を担当されていた佐藤敏郎氏をお招きしました。佐藤氏は大川小学校で起こった津波の被害により、当時6年生だった次女みずほさんを失っています。

佐藤氏は震災後、外部のプロジェクトにより女川町で行った俳句の授業で、中学生の心の動きを感じたそうです。震災直後の2011年5月、ある中学生は目の前の光景を『見たことのない 女川町を 受け止める』と詠み、また別の生徒は『窓ぎわで見えてくるのは 未来の町』と詠んでいます。2013年11月には『家がない やっとわかった そのつらさ』と、心にしまっていた思いを吐露した句も詠まれています。「みんなが分かる言葉」「未来につながる言葉」で自分の思いを表すことは、生徒たちの心をケアすることにつながりました。

この中学生たちは今、津波の怖さ、地震が起こったらまず避難することの大切さを千年後にまで伝えるため、女川町内21の浜に石碑を立てるプロジェクトを進めています。また地域の人びとの命を守っていくために、自分たちで安全をつくっていこうと、彼らは全市を挙げて避難訓練を実施する原動力にもなりました。

佐藤氏は、大川小学校で「なぜ50分の間に逃げなかったのか」「あの時、校庭であった事実」を懸命に探しています。「安全な避難場所」とされていた場所で起こった悲劇から、私たちはどんな場合も、「安全」よりも「命」を守ることを優先しなければならないことを学びました。日常の中で私たちは「安全」であるかどうかに意識を向けますが、子どもの命を守るためには、想定外を想定し、「その安全は本当に命を守るものなのか」を、常に検証していかなければならないと思います。

横浜YMCA　井上 孝一

●「インターナショナル・ワークキャンプ in モンゴル」に参加

子どものデイケアセンターを訪問。欲しい物を尋ねると、「愛情」という答えが返ってきた

7月6日から13日まで、アジア・太平洋YMCA同盟主催の「インターナショナル・ワークキャンプ in モンゴル」に北九州YMCAより2人の青年が参加しました。キャンプや発達支援プログラムでボランティアリーダーとして活動している小松将大さんと、北九州YMCAで日本語を学ぶモンゴル国留学生のエンク・ボルドクフさんです。2人とも大きな期待と少しの不安を抱えての出発でしたが、現地のユースやYMCA関係者、スタッフなど多くの方に支えられてさまざまな経験をして帰ってきました。モンゴル国から多くの留学生を受け入れている北九州YMCAとして、今後更に交流を重ねて行ければと思います。以下は、2人からの報告です。

北九州 YMCA　竹迫 英里

◆小松 将大(九州共立大学3年)

「普段YMCAで活動している時に、子どもたちが頑張る姿に魅力を感じたり、何かひきつけられるものを感じたりしますが、今回訪れたモンゴルでも同じようなものを感じました。

このワークキャンプのように、国や地域が違う若い人たちが集まって、未来について真剣に話し合ったりすることなんて、そう簡単にできることではないと思います。今後私は、現在関わっている子どもたちが、将来世界のことを少しでも考えて、恵まれない子どもたちにも目を向け、何か行動を起こすことができる人になれるように、話をしていきたいと思います。

今回の学びをYMCAだけでなく学校の友人にも伝え、世界の人びとのことを考えられる人間を一人でも多く増やし、微力ではありますが世界の平和に貢献できたらと思います」

◆エンク・ボルドクフ(北九州YMCA学院・日本語科)

「今回のワークキャンプでは、自分の国でホームステイをしたり、人びとを助けるにはどうしたら良いかを考えたりすることができ、自分にとって貴重な経験となりました。

私はモンゴル人ですが、このキャンプを通して自分の国に、より一層興味が湧きました。大学を卒業したらモンゴルに戻り、モンゴルYMCAの活動に参加したいと思います。また、他の国々にも行って人を助けるプログラムに挑戦したいと考えています」

●「ファミリーホーム操山寮」支援コンサートを実施 ——YMCAせとうち

コンサート後、歌手のAKIRAさんを囲んで

私たちの生かされている社会には、虐待や貧困により、保護者と共に暮らせなくなった子どもたちが、約4万7千人もいます。すべての命は、この世に与えられた奇跡であるにもかかわらず、現代社会はその存在を軽んじているような気がしてなりません。生まれ育った環境で人生が大きく左右される、そんな社会で良いのでしょうか。

YMCAせとうちは、どんな命も尊ばれる社会づくりの一翼を担いたいと、2011年より「ファミリーホーム操山寮」を運営しています。ファミリーホーム(小規模住居型児童養育事業)とは、保護者と暮らせなくなった子どもたちに、家庭的な雰囲気の中で育つ環境を提供し、共にHOMEを構築する働きです。

音楽を通じて、子どもたちに「あなたが大切」と語り掛けてくださるのは、歌手のAKIRAさん。7月23日に日本キリスト教団岡山信愛教会で開かれたコンサート「真夏のクリスマスライブ—ちいさいひとをまもるため—」のテーマは、「祈り」。AKIRAさんは「愛することをやめないで」「どんな命もかけがえのない存在」「家族になることは喜び」というメッセージを語られ、参加者たちが「私にできることは?」と考え始める機会ともなりました。

「貧しき者の友なる集い」として始まったYMCAに連なる私たちだからこそ、子どもたちの伴走者であり続け、そのバトンを引き継いでいきたいと願っています。

YMCAせとうち　美時 智子

アジア・世界のYMCAから

◆第2回アジア・太平洋YMCA同盟地球市民育成研修会開催
—アジア・太平洋YMCA同盟

2015年4月22日から30日まで、フィリピンのバギオYMCAに11の国と地域からボランティアやスタッフを含む20人のユースが集いました。

日本からは、ユースレプスに選出された伊藤剛士氏(東京YMCA)、大塚英彦氏(横浜YMCA)、岡田加奈子氏(大阪YMCA)の3人のユーススタッフが参加しました。地球市民の役割の理解、農村部と金鉱山でのホームステイ、住民へのインタビューによるコミュニティの問題の抽出と解決策の検討などを体験しました。参加者は、今後所属YMCAで行動計画を策定し、実行することが期待されています。

◆ハイチYMCA　8カ所目のコミュニティセンターを開設
—ハイチYMCA

2010年1月の震災以降、日本のYMCAを含む世界からの支援が寄せられたハイチYMCAでは、8カ所目のコミュニティセンターを首都の北にあるカラコル市に開設しました。ハイチYMCAは、各センターで学校プログラムや成人の識字教育などの社会貢献活動を行っています。今後、10のコミュニティで、10,000人のユースや成人のために社会的使命を果たしていくことを目指しています。

◆2015年度ドイツキリスト教会議における—"Ten Sing"(テンシング)※の活動　—ドイツYMCA

2015年6月3日から7日まで10万人近い人びとが、ドイツキリスト教会議に参加するためシュトゥットガルトを訪れました。期間中ドイツYMCAのテンシンググループがコンサートで歌や演奏、ダンス、演劇を披露し、ユースの立場でこの大会の雰囲気を盛り上げました。

※テンシングとは、ユースが音楽などパフォーマンスを通してキリスト教を伝える活動で、参加者の全人的な成長の場にもなっています。

●上記トピックの詳細(月刊PDF)は、日本YMCA同盟HPの「世界のYMCA」のページよりご覧いただけます(一部、英語のみ)。http://www.ymcajapan.org/world/index.html

一般財団法人日本宝くじ協会から寄贈

テントの設営を学ぶユースリーダー(富山YMCA)

一般財団法人日本宝くじ協会より、全国YMCAが行う地域奉仕プログラムのための集会用テントを42張、青少年教育プログラムのための宿泊用テントを81張寄贈いただきました。

テントは全国17YMCAの37のキャンプ場および施設に配置され、地域に根差したそれぞれの活動において有意義に用いられています。(日本YMCA同盟)